

類題演習：多様な「正義」と共生のジレンマ 解答例

問1：下線部(a)「知的な怠惰」の理由（150字以内）

解答例1（標準）：自分たちと異なる考え方を持つ相手を単純に「悪いもの」と決めつけ、それを排除すれば平和が訪れるという安易な正解に逃げ込んでしまうからである。複雑な対立の背景にある相手なりの正義や歴史を分析しようとせず、自分たちの価値観を変えずに済む誘惑に負けることは、問題の真の解決を遠ざける態度であるため。（150字）

解答例2（論理重視）：対立が生じた際、相手の価値観をその背景にある歴史や「価値の体系」として深く考察することを放棄しているからである。どちらが正しいかを急に判断し、他者を排除することで思考を停止させる態度は、自らの常識を相対化する知的労働を省くものであり、多層的な国際社会の現実を直視していないといえるため。（149字）

問2：下線部(b)「相克（ジレンマ）」の内容（200字以内）

解答例1（標準）：「異質な価値観をどこまで認めるべきか」という問い合わせにおいて、どちらの選択をしても不都合が生じる状況のことである。他者の自由を奪うような価値観まで認めてしまえば自らの社会が崩壊する恐れがあり、逆に自分たちの価値観を押し通そうとすれば相手への差別や抑圧につながってしまう。このように、寛容さと社会の維持という、相容れない二つの要請の間で板挟みになり、一筋縄では解決できない矛盾した状態を指す。（199字）

解答例2（構造理解重視）：他者を認める「寛容」が、逆に自らの自由や社会の安全を脅かす存在（不寛容な価値観）を許容してしまうリスクと、自らの正義を守る「防衛」が、他者への不当な「差別」に変質してしまうリスクが同時に存在する状況を指す。国家が独自の正義を持つ「価値の体系」である以上、一方の正義を立てれば他方の抑圧を招きかねないという、多文化共生社会が抱える根源的な対立構造のことである。（196字）

問3：下線部(c)「自画像の更新」についての考え（600字以内）

解答例1（標準：探究学習の事例を通じた論述）：私は、多文化共生において「自画像の更新」とは、単に他者を理解することではなく、他者という「鏡」に照らして自らの常識を疑い、自己を再構成し続ける姿勢であると考える。私は高校の探究学習で、地域の外国人住民との交流会に参加した。当初、私は「日本語を教えることが助けになる」という一方的な正義を抱いていた。しかし、彼らとの対話を通じて、彼らが求めていたのは指導ではなく、地域の一員としての対等な承認であることを知った。この時、私の内にある「助ける側と助けられる側」という固定的な価値の体系が崩れた。彼らとの遭遇は、私自身の無意識の特権性や偏見を浮き彫りにした。まさに他者を通じて自分を見つめ直し、自らの輪郭を描き直す「自画像の更新」の瞬間であった。国際社会にはいくつもの正義があり、それらはしばしば「相克」の状態にある。どちらか一方が正しいと決める「知的な怠惰」に陥るのではなく、対立する境界線において粘り強く対話を続けることが求められる。自画像を更新する知的労働は、時に自分の正しさを否定される痛みを伴う。しかし、自分の正義が「特定の正義」でしかないことを自覚し、他者の価値観とどう折り合いをつけるかを問い合わせることこそが、共生の第一歩である。島根県立大学での学びにおいても、多様な価値観との接触を恐れず、自らの「自画像」を柔軟に更新し続ける能動的な市民でありたい。

解答例 2 (論理重視: 高坂理論を応用した論述): (※問 3 は、自身の具体的な経験や、学校で学んだ歴史的背景を「自画像」の定義に当てはめて書いているかが評価の分かれ道となります。)